

2021年度 入学試験問題

国語

(60分)

〔注意〕

-
- ① 問題は㊦～㊨まであります。
 - ② 解答用紙はこの問題用紙の間にはさんであります。
 - ③ 解答用紙には受験番号、氏名を必ず記入すること。
 - ④ 各問題とも解答は解答用紙の所定のところへ記入すること。
 - ⑤ 各問題とも特に指定のない限り、句読点、記号なども一字に数えること。
-

西大和学園高等学校

問題は次のページから始まります。

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

今でこそ、当たり前前になっているが、明治になって日本に輸入された様々な概念の中でも、「個人 individual」というのは、最初、特によくわからないものだった。その理由は、日本が近代化に遅れていたから、というより、^①この概念の発想自体が、西洋文化に独特のものだったからである。

一つは、一神教であるキリスト教の信仰である。「誰も、二人の主人に仕えることは出来ない」というのがイエスの教えだった。人間には、幾つもの顔があつてはならない。常にただ一つの「本当の自分」で、一なる神を信仰していなければならぬ。だからこそ、元々は「分けられない」という意味しかなかった individual という言葉に、「個人」という意味が生じることとなる。

もう一つは、論理学である。椅子と机があるのを思い浮かべてもらいたい。それらは、それぞれ椅子と机とに分けられる。しかし、机は机で、もうそれ以上は分けられず、椅子は椅子で分けられない。つまり、この分けられない最小単位こそが「個体」だというのが、分析好きな西洋人の基本的な考え方である。

動物というカテゴリーが、更に小さく哺乳類に分けられ、ヒトに分けられ、人種に分けられ、男女に分けられ、一人一人にまで分けられる。もうこれ以上は分けようがない、一個の肉体を備えた存在が、「個体」としての人間、つまりは「個人」だ。国家があり、都市があり、何丁目何番地の家族があり、親があり、子があり、もうそれ以上細かくは分けようがないのが、あなたという「個人」である。

逆に考えるなら、個人というものを束ねていった先に、組織があり、社会がある。こうした思考法に、^②日本人は結局、どれくらい馴染んだのだろうか？

「個人」という概念は、何か大きな存在との関係を、対置して大掴みに捉える際には、確かに有意義だった。―社会に対して個人、つまり、国家と国民、会社と一社員、クラスと一生徒、……といった具合に。

I、私たちの日常の対人関係を緻密に見るならば、この「分けられない」、^A首□□した「本当の自分」という概念は、あまりに大雑把で、硬直的で、実感から乖離している。

信仰の有無は別としても、私たちが、日常生活で向き合っているのは、一なる神ではなく、多種多様な人々である。

また、社会と個人との関係を、どれほど頭の中で ^aチュウショウ的に描いてみても、朝起きて寝るまでに現実と接するのは、会社の上司や ^bドウリョウ、恋人やコンビニの店員など、やはり具体的な、多種多様な人々である。とりわけ、ネット時代となり、狭い均質

な共同体の範囲を超えて、背景を異にする色々な人との交流が盛んになると、彼らを十把一絡げじっばいちからに「社会」と括ってみてもほとんど意味がない。

私たちは、自分の個性が尊重されたいのと同じように、他者の個性も尊重しなければならぬ。繰り返しになるが、相手が誰であろうと、「これがありのままの私、本当の私だから！」とゴリ押ししようとすれば、ウンザリされることは目に見えている。私たちは、極自然に、相手の個性との間に調和を見出そうとし、コミュニケーション可能な人格をその都度生じさせ、その人格を現に生きている。それは、ゲンゼン^cたる事実だ。なぜなら、コミュニケーションが成立すると、単純にうれしいからである。

その複数の人格のそれぞれで、本音を語り合い、相手の言動に心を動かされ、考え込んだり、人生を変える決断を下したりしている。つまり、それら複数の人格は、すべて「本当の自分」である。

にも拘らず、選挙の投票（一人一票）だとか、教室での出席番号（まさしく「分けられない」整数）だとか、私たちの生活には、一なる「個人」として扱われる局面が依然として存在している。そして、自我だとか、「本当の自分」といった固定観念も染みついている。そこで、日常生活している複数の人格とは別に、どこかに中心となる「自我」が存在しているかのように考える。あるいは、結局、これらの複数の人格は表面的な「キャラ」や「仮面」に過ぎず、「本当の自分」は、その奥に存在しているのだと理解しようとする。この矛盾のために、^③私たちは思い悩み、苦しんできた。

Ⅱ、どうすればよいのか。

「自我を捨てなさい」とか「無私になりなさい」とかいったことは、人生相談などでも、よく耳にする。しかし、そんな悟り澄ましたようなことを聞かされても、じゃあ、どうやって生きていけばいいのかは、わからない。自分という人間は、現に存在している。この「私」は、一体、どうなるのか？ 無欲になりなさい、という意味だとするなら、出家でもするしかない。

私たちには、生きていく上での足場が必要である。その足場を、対人関係の中で、現に生じている複数の人格に置いてみよう。その中心には自我や「本当の自分」は存在していない。ただ、人格同士がリンクされ、ネットワーク化されているだけである。

不可分と思われている「個人」を分けて、その下に更に小さな単位を考える。そのために、本書では、「分人」(dividual)という造語を導入した。「分けられる」という意味だ。

しかし、自我を否定して、そんな複数の人格だけで、どうやって生きていけるのか？

尤もな疑問である。そこで、ここからは、どうすればそれが可能なのかを、順を追って テイネイ^dに見ていきたい。

Ⅲ、イメージをつかんでもらいたい。

一人の人間の中には、複数の分人が存在している。両親との分人、恋人との分人、親友との分人、職場での分人、……あなたという人間は、これらの分人の集合体である。

個人を整数の1だとすると、分人は分数だ。人によって対人関係の数はちがうので、分母は様々である。そして、ここが重要なのだが、相手との関係によって分子も変わってくる。

関係の深い相手との分人は大きく、関係の浅い相手との分人は小さい。すべての分人を足すと1になる、と、ひとまずは考えてもらいたい。

分人のネットワークには、中心が存在しない。なぜか？ 分人は、自分で勝手に生み出す人格ではなく、常に、環境や対人関係の中で形成されるからだ。私たちの生きている世界に、唯一絶対の場所がないように、分人も、一人一人の人間が独自の構成比率で抱えている。そして、そのスイッチングは、中心の司令塔が意識的に行っているのではなく、相手次第でオートマチックになされている。街中で、友達にバツタリ出会って、「おお！」と声を上げる時、私たちは、無意識にその人との分人になる。「本当の自分」が、慌てて意識的に、仮面をかぶったり、キャラを演じたりするわけではない。感情を隅々までコントロールすることなど不可能である。

④ 分人をベースに自分を考えるということ、単に「自我を捨てる」ということとはどこが違うのか？

私たちは、生きていく上で、継続性をもって特定の人と関わっていかなければならない。

そのためには、誰かと会う度に、まったく新しい自分であることはできない。入社する度に、自己紹介から始めて、一から関係を結び直すという、バカげた話はない。

私たちは、朝、日が昇って、夕方、日が沈む、という反復的なサイクルを生きながら、身の回りの他者とも、反復的なコミュニケーションを重ねている。

人格とは、その反復を通じて形成される一種のパターンである。

この人とは、こういう態度で、こういう喋り方をすると、コミュニケーションが成功する。それに、^eフズイして、^B怒[□]楽[□]様々な感情が自分の中で湧き起こる。会う回数が増えれば増えるほど、パターンの精度は上がってゆく。また、親密さが増せば増すほど、パターンはより複雑なコミュニケーションにも対応可能な広がりを持つ。それが、関係する人間の数だけ、分人として備わっているのが人間である。

Ⅳ、他者とは必ずしも生身の人間でなくてもかまわない。ネット上でのみ交流する相手でもかまわないし、自分の大好きな文学・音楽・絵画でもかまわない。あるいは、ペットの犬や猫でも、私たちは、コミュニケーションのための一つの分人を所有しうるのだ。

(平野 啓一郎『自分とは何か』による)

問一 二重傍線部 a ～ e のカタカナを漢字に直せ。楷書で丁寧に書くこと。

問二 空欄 I ～ IV にあてはまる最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。同じ記号は一度しか使えない。

ア まず イ たとえば ウ また エ ならば オ ところが

問三 波線部 A、B の空欄に適切な漢字を一字ずつ入れて、四字熟語を完成させよ。

問四 傍線部①「この概念の発想自体が、西洋文化に独特のものであった」とあるが、「この概念」は「西洋」のどのような姿勢から生まれたのか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 宗教的観点では、一なる神を信仰するために自分を高めていく必要があると考え、また論理学的観点では、個人という単位から社会を捉えようとする姿勢。

イ 宗教的観点では、一なる神を信仰するために本当の自分を作る必要があると考え、また論理学的観点では、物を永遠に小さい単位分まで分析して考えようとする姿勢。

ウ 宗教的観点では、一なる神に対峙するの唯一の真なる自分であると考え、また論理学的観点では、物を可能な限り小さい単位まで分析して考えようとする姿勢。

エ 宗教的観点では、一なる神に対峙するのは真なる顔を持つ自分であると考え、また論理学的観点では、物事をできるだけ大きな枠組みから出発して考えようとする姿勢。

オ 宗教的観点では、一なる神に対峙するのは普段と異なる自分であると考え、また論理学的観点では、椅子と机を別個に分け、それぞれを最小単位だと考えようとする姿勢。

問五 傍線部②「日本人は結局、どれくらい馴染んだのだろうか」とあるが、「本当の自分」という考え方に日本人が馴染めなかったのはなぜか。五十字以内で説明せよ。

問六 傍線部③「私たちは思い悩み、苦しんできた」とあるが、なぜか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 私たちは、複数の人格を有しているのに、唯一の本当の自分という固定観念に囚われてしまっているから。

イ 私たちは、本当の自分が存在するはずなのに、相手ごとに表面的な「キャラ」を作る必要があるから。

ウ 私たちは、多種多様な人とかかわるのに、唯一の本当の自分という軸を持って接する必要があるから。

エ 私たちは、本音を語り、相手から信用されるために、常に唯一の本当の自分になることを求められるから。
オ 私たちは、中心となる自我を意識するあまり、人に本当の自分を表現することができなくなっているから。

問七

傍線部④「分人をベースに自分を考える」ということと、単に『自我を捨てる』ということとはどこが違うのか」とあるが、これについて次の各問いに答えよ。

(1) 「自我を捨てる」とは、どのようなことか。それが説明されている箇所を二十二字で抜き出し、初めと終わりの三字を答えよ。

(2) 「分人をベースに自分を考える」とは、どうすることか。六十字以内で説明せよ。

問題は次のページに続きます。

次の文章は、辻村深月の小説の一節である。若美谷高校二年生の一平、リュウ、拓史は、映画同好会に所属している。同好会を「部」に昇格させたい一平は、元演劇部の立花先輩に自主制作映画の主役の依頼をするが、断られてしまう。諦めきれない一平たちに、立花先輩は宝石職人が描かれた本の探索を求めてくる。交渉の糸口を探していたところ、立花先輩が演劇部を退部したきっかけは、新聞部の三根先輩の取材にあることが判明した。三根先輩の取材は、中学時代目立たない存在だった立花先輩の過去を暴くというものだった。次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

新聞部の第二美術室を出て、映画同好会の技術室に戻るまでの間、俺たちはしばらく無言だった。足元を睨むにらようにして部屋まで歩いていく。

技術室に戻ると、ようやく息をするのが許された気がした。

「あのさ」と最初に口をきいたのは、拓史だった。

「似てると思わない？ 宝石職人の話と、立花先輩の境遇」

「似てる？」

「友達や、これまで築いてきたものの全部を失っても、それとひきかえに世界一美しい宝石を作るかどうか」

「あ」

厳密に考えると違うかもしれないけど、根っここの部分は確かによく似ている気がした。

—先輩は本当に本が好きなんですネ、と尋ねた俺に、立花先輩は「そうよ」と答えた。「本を読むの、大好きなの」と。その本の世界に、立花先輩は何かを託たくしたのかもしれない。

存在しないかもしれない幻まぼろしの本。

宝石職人がどうするのかを、先輩は本当に知りたいのだ。

そのときだった。

「描かけばー」

俺の頭にあつとその考えが舞い降りてきた。

「描かけば、どうだろう。俺たちで」

思わず声にしてしまったから、一瞬遅れで自分の体にそのアイデアが沁しみみこんで来る。自分でも自分の思いつきにびっくりしている

た。「あ」と声を上げたりユウが立ち尽くしていた。「あー、そうだよ！」と突き抜けるような声を出す。

「一平、ナイス！ そうだよ。なんで今まで気づかなかったんだらう。宝石職人の話が存在しないなら、自分たちで描けばいいんだよ。結末を自分たちで考えて、絵をつけて」

心が決まる。互いの目を見るだけで、気持ちと同じなのがわかった。今度こそ、全員が本気だ。

「やろう」

俺の声に、二人が A 頷いた。

拓史が絵を描き、俺が文を書く。製本の担当は手先が器用なりユウで、内容の結末は全員で一緒に考える。

「安易なハッピーエンドじゃ駄目だと思うんだ」

俺が提案する。それは、この一ヵ月近く、立花先輩の元に通い続けた俺の、直感のようなものだった。立花先輩は、おぞなりな結
末は望んでない。

すべてとひきかえに、世界一美しい宝石を作るか。

今の生活を守りながら、宝石作りを諦めるか。

先輩が俺たちの映画に出てくれるかどうかは、この結末にかかっている。

結論が出ないまま、各自宿題のように本の内容を家に持ち帰る。夕飯を終え、ああでもない、こうでもない、と部屋で悩んでいると、夜遅くになって親父が帰ってきた。

「ただいま」の声に答えず、そのまま部屋にいと、母さんが親父のために夕食を温め直している気配がした。そのまま、いつものスポーツニュースの声が聞こえてくる。

空気が一変したと感じたのは、そろそろ十二時を回るといふ頃だった。親父が、廊下で誰かと携帯で話す声が聞こえた。テレビの音が消えている。

「ええっ？」と驚いたような大声が上がる。

さすがに気になってそっと廊下に出ると、「わかりました」と親父が電話の向こうの相手に答えているところだった。

「すぐに行きます」

携帯を口元に当てたまま、脱いだばかりの背広を着こむ。俺はとっさにリビングまで行つて時計を見た。もう、日付が変わる。なのに、会社に戻るつもりなのか。

電話を切った親父が「すまん」と俺たちに謝った。

「急に仕事が入った。今日はたぶんもう徹夜作業になると思うから、母さんと一平は先に寝てくれ」

「どうしたの、急に」

とまどった様子の母さんの目を、親父が覗きこむ。とても大事なことを伝えるように、まっすぐに視線を合わせて言う。

「――白カビが原因の、新種の喘息ぜんそくの事例が確認されたらしい。うちですつと研究してきた薬が使えるかもしれない」

母さんの顔にはととした表情が浮かんだ。唇を開いた形のまま、目を見開く。親父の顔が、なぜか、泣きそうに見えた。それは、俺の目の錯覚か、気のせいだったかもしれないけど、とにかく一瞬、そう見えた。

「間に合ったのかもしれない」と親父が言った。

俺には何のことか意味がまったくわからなかったけど、母さんが黙ったまま、小さく顎あごを引いて頷うなずいた。そのまま「いつてらっしゃい」と親父を送り出す。

慌しく出て行く親父が「一平、夜にうるさくしてごめんな」と俺を振り返った。

もう高校生なんだし、謝られることでもなかったけど、小さな頃されたように頭をなでられそうになって、あわてて体を引いてかわす。そんなのは照れくさいから勘弁して欲しい。

俺に手をかわされた親父は、寂しそうに **B** 笑った。「いつてきます」と呟いて、玄関を出ていく。携帯を鞆たもとにしまいこむ手

元が見えた。俺が小さい頃からずつとつけっぱなしになっている、ペンライトのような筒状のキーホルダーが揺れる。いい加減もう何十年もつけてるせいで、表面の金属は磨り減ってるし、色も茶色味がかっている。前に一度、取り替えたなら？ と尋ねたら、苦笑しながら、「かわりはないんだ」と首を振られた。

「父さんって、喘息の薬の研究してたの？」

親父を送り出してから尋ねると、母さんが「ええ」と答えて、俺を見た。

「そうよ。何年も前から、薬の研究を続けてきた。父さんの薬で、これから助かる子たちが何人もいるかもしれない」

「へえ」

「昔の友達に、そういう薬を作るんだって、約束したの」

母さんの目の上に、C 水の膜が張る。驚く俺の前で「ごめん」と言っ、あわてて目頭を押さえた。

宝石職人の絵本は、出来上がってみると、いかにも市販のものとは違う箇所が目立った。バーコードも価格も出版社も、一応それらしく、^{（手）}レタリングしてデザインに入れたけど、絵も文字も、結局紙に直に書いた。

下手に細工したところで、どうせ、どこかに粗が出てしまっ、完全にごまかすことはできないだろう。だったら最初から手作りであることを隠すのはやめた。

タイトルは『世界で一番美しい宝石』。

拓史に任せた表紙には、タイトルだけが入っ、そこに「世界一美しい」とされる宝石の絵は描かれなかった。

「見つけてきました」

窓辺の席に座る立花先輩の前に、本を差し出す。今日は、リュウと拓史も一緒だった。

立花先輩が、信じられないものを見るように絵本を見つめた。おそろおそろといった様子で手を伸ばし、俺の手から本を受け取る。

手触りや感じから、すぐに手作りだとわかったのだろう。はっと顔を上げ、俺たち三人の顔を順番に見た。唇を閉じたまま、一言も発しない。俺たちも黙ったままだった。

やがて先輩が「見てもいい？」と尋ねた。少し身構えたような硬い声だった。

「どうぞ」

「ありがとう」

本を渡し、俺たちはD先輩の元を離れた。なるべくゆっくり、誰にも気兼ねせず読んで欲しい。——とはいえ、俺たちが用意した結末を読んで先輩がどう思うかを考えたら、全身が心臓になったように、鼓動が大きく打ちつける。

正解を出せたのかどうかは、わからなかった。

宝石職人は、すべてとひきかえに、ただそれが見てみたいという欲求に耐えられず、世界で一番美しい宝石を作る才能を手に入れる。

家族も友人も失い、すべてに去られた後、孤独の中で彼が作った宝石は光り輝き、多くの人々にその美しさを絶賛される。職人は名誉と金を手にする。

しかし、宝石職人自身は、その「世界一」とされる宝石を、どう見ても美しいと感じることができない。かつて自分が作っていたものの方がよほど美しかった、と自分に力を与えた魔法使いを呪うが、職人本人以外は、彼の宝石をいつまでも「世界一美しい」と貴び、称え、皆、幸せそうに身につける。

その笑顔とひきかえに、宝石職人は自分がすべてを失ったのだと知る。

そこで、絵本は終わる。

ものづくりってなんだろう、と頭がおかしくなるくらい考えて、三人で決めた結論がこれだった。

絵本作りが佳境に差ししかかった頃、ちょうど数日ぶりに親父が家に帰ってきた。

例の新種の喘息は、瞬く間に全国的に発症が確認され、ちよつとしたニュースになっていたが、それに寄り添う形で、親父の会社に新薬の準備があったこと、早期発見された場合には、その薬が観面に効果があることも、同時に報道されていた。

「準備してきた薬が効かなかったら、どうするつもりだったの？」

疲れたようにリビングのソファに上体をもたせかけた親父に尋ねてみた。自分が一生を懸ける覚悟でやってきたことが徒労に終わったとしたら、後に残る気持ちはどんなものになるだろう。そう思って聞いた俺の言葉に、親父はごく自然な口調で「そうだなあ」と答えた。

「そしたら、それでも俺の失敗をバネに、どこかの誰かが新薬を作ってくれるだろうと期待する。きっと、無駄にはならない」

眠そうに半目を開けた親父が、唐突に「映画部で、映画、撮ってるんだって？」と尋ねてきた。母さんから聞いたのかもしれない。

俺は姿勢を **E** 伸ばして、ぎこちなく「まあ」と答えた。本当は、映画部は同好会とまりで、部「じゃないし、映画だって撮れるかどうかかわからないことは黙っていた。

②「がんばれよ」と親父に背中を、とん、とやられた。

眠そうに見えたのに、その力強さにとまどう。見れば、親父は完全に目を閉じて、もう寝息を立て始めるところだった。―もともとこういう、単純な体の仕組みをしてる人なのだ。毛布を持ってきてかけながら、親父の寝顔に向かって、一言「お疲れ」と呟いた。

ものづくりが徒労に終わるかもしれないなんて、決めるのは結局誰かの主観でしかない。何が無駄かなんてことを決めるのも、人それぞれだ。

俺たちが用意した絵本の結末を、先輩がどう解釈しても構わない。その先に見るものは、読み手によって、みんな、違はずだ。「読んだわよ」という声が出て、我に返る。

図書室の隅で、試験の結果発表を待つような気持ちでいた俺たちがそろって顔を上げると、立花先輩が仁王立ちhにおうのような格好で立っていた。

表情は、唇を引き結び、怒っているようにも、何かをこらえているようにも見えた。だけど、目が合った瞬間に、瞳の中が真っ赤になる。

「どうでした？」

面と向かって聞く勇気があったのは、リュウだけだった。俺と拓史は、黙りこくったまま先輩の顔を見つめる。先輩がふいと横を向く。そっぽを向かれたのかと思つてあわてて立ち上がりかけたそのとき、先輩の顔の前に、涙の粒がまるで朝露のように光って飛んだ。

—あ、今のいい。

と思つてしまう。どんな映画の演出でも、こんなきれいな涙は観たことない。俺が、この演出を使う第一号になりたい。

「映画、出てもいいよ」という先輩の声は、とても小さくて、注意しないと聞き逃してしまいそうなほどだった。だけど、俺たちの耳に、その声はしっかりと届いた。

映画の撮影に入つてしばらくした頃、司書の海野先生が、「ちよつといい？」と俺たちに話しかけてきた。ちよつといい画えを求めて図書室に（ま）ロケハンに来てたときで、立花先輩はいなかった。

「あなたたちが探してた本、見つけたわよ」

そう告げられたとき、何のことか、とっさにわからなかった。だけど、次の瞬間、先生が手にしている薄い本のタイトルを見て、あつとなつた。

『職人と世界一の宝石』

拓史もリュウも、俺の横で驚いていた。表紙には美しい宝石が描かれ、小人のような帽子をかぶった職人の姿がその隣に並ぶ。拓史が描いたものとは、まるで似ていないイラストだった。

「友達に協力してもらつて、一緒に探してたの。私の友達も本が好きでね、昔、図書室を通じて私と友達になったから、本のことで

困ってる子がいるならば協力したいって力を貸してくれたの」

海野先生が笑う。どこまで事情を知っているのか、俺たちのことを見ていたのかわからないけど、すべてお見通しのような顔で静かに首を振る。

「もう、あなたたちには必要ないかもしれないけど」

「これ、どこで」

「個人の作者の自費出版の本なんだって。近くの図書館なんかには寄付したみたいだけど、一般的にはほとんど出回らなかったみたい。だから存在が知られてなかったのね」

自費出版とはいえ、手に取ると本は俺たちが作ったものの何倍も重量感があつて、背も、カバーも、紙も、ずつとしっかりしていた。

「本当にあつたんだ。誰だよ、存在しないって言ったヤツ」

リュウが呟くと、拓史がつまらなそうに唇を尖とがらせる。

「いいだろ、結果、今うまくいってるんだから。それより、内容は？俺たちが作ったのとどっちがいい？」
拓史とリュウ、それぞれが手を伸ばして、本を奪おうとする。④俺はされるがまま、本を二人の手に委ゆたねた。

(辻村 深月『世界で一番美しい宝石』による)

(注1) レタリング … 美しく読みやすい字にしたり、書体を選択したりすること。

(注2) ロケハン … ロケーション・ハンティング。映画の制作において、主に屋外のロケ地を探すことを指す和製英語。

問一 二重傍線部 a 「おざなりな」、b 「佳境」の意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

a 「おざなりな」

ア 熱心なこと

イ 無作為なこと

ウ 妥当なこと

エ 無関心なこと

オ いい加減なこと

b 「佳境」

ア 油断できない場面

イ 終わりに近づいた場面

ウ 最も興味深い場面

エ 複雑に絡み合っている場面

オ 始まったばかりの場面

問二 空欄 A 〃 E に当てはまる最も適当なことを、次の中から一つずつ選び、記号で答えよ。

ア うつすらと

イ ふつと

ウ しゃんと

エ しっかりと

オ そつと

問三 傍線部①「親父の顔が、なぜか、泣きそうに見えた」とあるが、この時の父の気持ちを手十字以内で説明せよ。

問四 傍線部②「『がんばれよ』と親父に背中を、とん、とやられた」とあるが、この時の父の様子として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 父は家庭を顧みる余裕がなかったにもかかわらず、自分の仕事内容を分かりやすく丁寧に語り、映画同好会のことで悩み続けている一平を勇気づけてくれた。

イ 父は普段感情を表に出さない性格にもかかわらず、薬の話になると自分の秘めた思いを語りだし、葛藤している一平の映画同好会での活動を後押ししてくれた。

ウ 父は数日間にわたる多忙な仕事で疲労していたにもかかわらず、薬の研究に対する自分の信念を語り、奮闘している一平の映画製作を力強く応援してくれた。

エ 父は長年研究してきた新薬が世間に認められたにもかかわらず、謙虚に今までの研究活動を振り返り、映画製作を誠実に取り組むことを一平に伝えてくれた。

オ 父は新薬への強い思いを持っていたにもかかわらず、薬が失敗する可能性も視野に入れており、一平の映画作りが失敗しても落ち込まないように励ましてくれた。

問五

傍線部③「先輩の顔の前に、涙の粒がまるで朝露のように光って飛んだ」とあるが、この時の立花先輩の気持ちとして、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 『世界で一番美しい宝石』の話から、宝石の美しさに惹かれて寄って来る人には価値がなく、今まで支えてくれていた家族や友人の大切さに気付き、もう一度演劇と向き合ってみようと思っている。

イ 『世界で一番美しい宝石』の話から、自分が周囲にどのように評価されているのかということには価値がなく、自分の感性を信じるこの大切さに気付き、もう一度演劇と向き合ってみようと思っている。

ウ 『世界で一番美しい宝石』の話から、金銭で買ってしまうものには価値がなく、日頃お世話になっている周りの人たちを愛することの大切さに気付き、もう一度演劇と向き合ってみようと思っている。

エ 『世界で一番美しい宝石』の話から、独りよがりの欲求には価値がなく、他人の幸せのために自分の力や才能を尽くしていくことの大切さに気付き、もう一度演劇と向き合ってみようと思っている。

オ 『世界で一番美しい宝石』の話から、不思議な力を持った魔法使いには価値がなく、どんな人間でも一人ひとり才能があると

いうことの大切さに気付き、もう一度演劇と向き合ってみようと思っている。

問六 傍線部④「俺はされるがまま、本を二人の手に委ねた」とあるが、なぜか。七十字以内で説明せよ。

問七 本文の内容として、当てはまるものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 波線部 a 「この一カ月近く」、波線部 b 「十二時を回るといっ頃」といった具体的な数値を用いた時間を示すことによって、場面の切り替えが円滑に行われ、物語が重層的に語られている。

イ 波線部 c 「廊下で誰かと携帯で話す声が聞こえた」、波線部 d 「視線を合わせて言う」のように感覚に訴える表現が多用されることによって、登場人物の心情と行動との結びつきが明示されている。

ウ 波線部 e 「ペンライトのような筒状のキーホルダー」のように父が使用している具体的なものを描くことによって、長い間一つの物を大切に持ち続けているという父の人物像が描き出されている。

エ 波線部 f 「全身が心臓になったように」、波線部 h 「仁王立ちのような」といった立花先輩の様子を比喩表現で描写することによって、立花先輩の反応を気にする一平の心情が強調されている。

オ 波線部 g 「毛布を持ってきてかけながら」のように父の体調を気遣う一平の行動を細かに描写することによって、思春期を迎えた一平が大人へと成長していく姿が生き生きと表現されている。

問題は次のページに続きます。

内の大臣（『殿・大臣・大殿』も同じ。）の妻である西院の上（二人の男子『中将・侍従』と、一人の女子『姫君』の母。）は、体調を崩したので、今後の子どもたちのことを気がかりに思っている。次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

内の大臣の西院の上、この春の頃よりなにとなくわづらひ給へば、例の御事にやと思すに、さもなく、おどろおどろしくは見え給はぬものから、いつとなく世を心細げに思して、うち泣きなどし給ふを、殿はいかに思しなるにかとあやしう静心なく思されて、御祈りなど始め給へど、はかばかしき験も見え給はず、同じさまにのみ物などもつゆ見入れ給はず程経るをかなしう嘆く。前齋宮に、姫君の御事（注3）を御心地の隙にはこまやかに書き続けきこえさせ給ふを、いかなるべき御心にかといとあはれに思さる。何事も御心広きやうにて、はらから（注4）などもあまたおはせぬに、限りなく思ひ交はし給へば、御訪ひなども隙なくこまやかに思しやるを、内の大臣はありがたうもとかしこまり申し給ふ。

かくて秋も過ぎぬ。弱りゆく虫の声々もわが身の上と思さる。紅葉を誘ふ木枯らしも殊に身にしむ心地して、この度はかりやと思さるるままに、姫君をつゆも傍ら去らずもてなし給ふ。このほどとなりては御命もむげに弱々しくなりまさり給ふ。つねは消え入りのみし給ふを、大臣は悲しう思ひきこえ給ふ。いかにして前齋宮にいま一度対面し奉らんと思しけるをもり聞き給ひて、いと悲しう思せば、忍びて渡り給へるを、限りなく嬉しと思したるさまあはれなり。ありしにもあらず影のやうにて臥し給へるを見給ふに御心も惑ふばかりにて、今までおぼつかなくて過ぐしてけるよと限りなく思さる。いとたゆげにあるかなきかの御様ながらも、君達のことをいとうしろめたげにのたまひていみじく泣い給ふ中にも、

「中将・侍従などは男に侍れば、心やすきかたも交じり侍る。姫君のいまだいはけなきほどを、かひなき我さへ行き隠れ侍りなんこと、いと悲しくうしろめたく侍る。大殿もただ今はおろかならずものし給へど、男はこまかならぬものなれば、いかやうにかさすらへんと思ひ侍るなん、限りあらん道にもやすかるまじき心地ぞし侍る。御心ざしのほど思ひ知りて侍れば、さりとも、はかなきさまには御覽じ放ち給はじ。行く末変はらずはぐくませ給へ」

など、さまざまに頼みきこえて、いと弱げに言ひもやらず泣い給ふ。かくのたまひ続けるを聞き給ふにおろかに思されんやは。互に涙にくらされ給ひながら、

「姫君の御事はゆめゆめうしろめたくな思ひきこえ給ひそ。いかでかつゆおろかに侍るべき。分くかたなくこの年頃頼もしきかたにも思ひ侍りつるを、うち捨ててたちまちに先立ち給はんこといと悲しく」とて、せきかね給へるに、いといたく更けぬれば、

「今はとく帰り給ひね」

とのたまひながら、

「またいつかは」

と思すに心細く悲しくて、ひき留めきこえ給へば、帰り給ふべき心地もし給はねど、明け方になりぬれば乗り給ふ。

(『苔の衣』による)

(注1) 物などもつゆ見入れ給はず程経る

∴ 「食事などにも全く見向きもなさらない状態で時が経ってゆく」ということ。

(注2) 前齋宮

∴ 「西院の上」の姉。

(注3) 御心地の隙にはこまやかに書き続けきこえさせ給ふ

∴ 「ご気分がましな時にはひまを見つけてこまごまと書き続けてお願い申し上げなさる」ということ。

(注4) はらからなどもあまたおはせぬに、限りなく思ひ交はし給へば

∴ 「ご兄弟なども多くはいらっしやらないので、西院の上は、前齋宮とお互いにとても親密にしていらっしやるので」ということ。

(注5) 悲しう思ひきこえ給ふ

∴ 「悲しく思い申し上げなさる」ということ。

問一 波線部Ⅰ「思しやる」、波線部Ⅱ「消え入りのみし給ふ」、波線部Ⅲ「渡り給へる」の主体（主語）は誰か、次の中から最も適当なものそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。その際、同じ記号を何度使ってもよい。

ア 内の大臣 イ 西院の上 ウ 前斎宮 エ 姫君 オ 中将・侍従

問二 二重傍線部A「おどろおどろしくは見え給はぬものから」、二重傍線部B「せきかね給へる」とあるが、それらのことばの本文中の意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

A「おどろおどろしくは見え給はぬものから」

ア 西院の上はとても機嫌が悪くお見受けされたのに

イ 西院の上はとても重い症状にお見受けされたのに

ウ 西院の上はそれ程不機嫌にはお見受けされないが

エ 西院の上は特に重い症状にはお見受けされないが

オ 西院の上は特に軽い症状にはお見受けされないが

B「せきかね給へる」

ア 前斎宮は御せきをこらえていらつしやる

イ 前斎宮は御叱責をしかねていらつしやる

ウ 前斎宮は涙をおさえかねていらつしやる

エ 前斎宮は顔を少し赤らめていらつしやる

オ 前斎宮は席につこうとしていらつしやる

問三 傍線部①「御祈りなど始め給へど、はかばかしき験も見え給はず」とはどういうことか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 病気を治すため加持祈祷を始めたので、少しずつ西院の上の病気は快復したということ。

イ 病気を治すため加持祈祷を始めたが、西院の上の病気はよくはならなかったということ。

ウ 病気を治すため加持祈祷を始めたが、西院の上の気持ちは病気以外に移ったということ。

エ 仏道修行としてのお祈りを始めたが、西院の上が帰依することは許されないということ。

オ 仏道修行としてのお祈りを始めたので、観音菩薩が夢に現われなざるはずだということ。

問四 傍線部②「わが身の上と思さる（ご自分の身の上のような気がなさる）」とあるが、西院の上はどのように思っているとか。三十五字以内で説明せよ。

問五 傍線部③「いかにして前斎宮にいま一度対面し奉らん」とあるが、西院の上が前斎宮になんとしてでももう一度会いたいと思っているのはなぜか。解答欄に合うように十字以内で説明せよ。

問六 傍線部④「かひなき我さへ行き隠れ侍りなんこと、いと悲しくうしろめたく侍る」とあるが、どういうことか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。ちなみに「さへ」は「くまでも」と訳をする。「添加」の意味を表す副助詞である。

ア 西院の上は、自分でさえ生きていくのが困難なこの世の中で幼い姫君が生きていくことはできないと姫君の死を確信したという事。

イ 西院の上は、姫君が幼く非力である上に、守ってやれなくなるかもしれないと考え、姫君のことを気がかりに思っているという事。

ウ 非力な姫君がひとり生きていけるように教育を施した西院の上は、しっかりと育った姫君のことを頼もしく思っているという事。

エ 西院の上は、男兄弟と一緒に育てたことで力強く育った姫君に対し何もしてやれることはないと感じ、悲しく思っているという事。

オ 西院の上は、生き生きとした姫君を目の当たりにすることで、老い先短い自分の運命をはかなく感じ、悲しく思っているという事。

問七 傍線部⑤「姫君の御事はゆめゆめうしろめたくな思ひきこえ給ひそ」を口語訳せよ。

問八 二段落目の内容としてふさわしくないものを一つ選び、記号で答えよ。

- ア 生氣のない姿で臥せっている西院の上を見て、前斎宮はもつと早く来ればよかったとひどく嘆いた。
- イ 息子の中将や侍従は男なので、自分が死んでも何とでもなるだろうと西院の上は気楽に考えている。
- ウ 今は夫が姫君を大切にしてくれているが、自分亡き後どのようなかと西院の上は心配している。
- エ 西院の上の言葉に心を打たれ、前斎宮は何とか不安を取り除いてやろうと西院の上は言葉をかけた。
- オ 今生の別れになることはないと分かり、また夜も明けはじめていたので西院の上は仕方なく車に乗った。

国語解答用紙

受験番号	氏名

※の欄には何も書かなくていい。

一										
問七				問五			問三	問二	問一	
				(2) (1)			A	I	a	
							首			
							—	II		
									b	
							B			
							怒			
							楽	IV	c	
				問六			問四			
									d	
									e	
									※	

二							
問七	問六			問四	問三		問一
							a
					問五		b
							問二
							A
							B
							C
							D
							E
							※

三						
問八	問七	問五	問四		問一	
					I	
					II	
					III	
					問二	
					A	
					B	
					問三	
					※	

※